

和歌山大学経済学会『研究年報』第15号（2011年）pp.125-131

基礎演習Ⅱアンケート分析

Analysis of a Questionnaire about the Freshman Seminar 2

清 弘 正 子

Masako KIYOHIO

Abstract

This paper analyses responses to a questionnaire about the Freshman Seminar 2, completed in June 2011. To a certain extent, the questionnaire demonstrates that a consensus has been achieved on the concept behind the Freshman Seminar 2. But the contents of the responses vary in their details. We therefore need to create opportunities for accumulating shared knowledge.

はじめに

本稿は、和歌山大学経済学部において開講されている基礎演習Ⅱについて行った教員アンケートの結果⁽¹⁾を分析し、基礎演習Ⅱが講義として抱える問題点を明らかにすることを目的としている。

1. 基礎演習Ⅱの概要

和歌山大学経済学部において開講されている基礎演習Ⅱは、開講形態を基準として2つの期間に区分することができる。

1-1. 第1期（2007年度から2009年度）⁽²⁾

和歌山大学経済学部では、前稿「基礎演習Ⅰアンケート分析」（岡田）にある通り、2002年度から、1年次生前期において全新入生を対象として少人数・演習形式の基礎演習Ⅰを開設していた。しかし、こうした少人数・演習形式の導入期教育科目はこの基礎演習Ⅰのみであり、3年次から始まる専門演習・卒業論文の作成にいかにつなげていくかという問題があった。基礎演習Ⅱは、空白となっていた1年次生後期における少人数形式での導入期教育として、2007年度より開設された基礎科目（2単位）である。読み書き能力、プレゼンテーション能力、ディスカッション能力といった基礎学力を着実に修得させることを目的としている。

（1）ご多忙中、アンケートにご協力いただいた全教員に感謝申し上げます。

（2）2006年度に設けられた基礎教育ワーキンググループによる報告書（2006年および2007年）を参考とした。

ただし、2007年度から2009年度については、一貫した少人数教育のカリキュラムを確立するための試行期間として、1クラスあたり20名程度を上限として2クラスのみが開講された。また、実際の講義運営上は、1年次生の受講生の数が少なく、この点で、3年次の専門演習につなげる教育カリキュラムとしては問題を抱えていた。

1－2. 第2期（2010年度から）

2010年度より、クラス数を15クラスに増加させ、また、実質的に必修化する形がとられた。和歌山大学経済学部のカリキュラムにおいて、導入期教育として基礎演習Ⅱが本格的に導入されたといえる。

基礎演習Ⅱの具体的な授業方法については、教授会で確認された概要に従い作成された教務委員会案に基づき、基礎演習Ⅱの担当を予定する教員によって協議・決定された⁽³⁾。

2. アンケート概要

アンケートは、2011年6月に経済学部教務委員会と共同して、2010年度の基礎演習Ⅱ担当者（15名）を対象に実施し、回答数は10であった。したがって、本稿の分析対象としているアンケートは、和歌山大学経済学部における導入期教育として基礎演習Ⅱが本格的に導入された年度に実施したものと位置づけることができる。

アンケート項目は次の4問である。第1問は、「基礎演習Ⅱを行う際に、最も重要視した点を記入してください」として、担当教員が教育を実際に行った際の主眼点や着目点について回答を求める内容となっている。第2問は、「基礎演習Ⅱは、基礎演習Ⅰで修得したスキルをもとに、より高度な読み書き能力、ディスカッション能力、プレゼンテーション能力の修得を目指す科目と位置づけられています（シラバスより）。このことを実現するにあたってやりにくかった点・改善すべき点がありますか？また、このことに関してご自身で工夫された点があれば教えてください」として、基礎演習Ⅱの特徴のひとつである基礎演習Ⅰとの継続性・発展性について回答してもらうことを狙いとした。第3問は、「教科書として指定した文献およびその文献を選定した理由・狙いを記入してください」、第4問は「基礎演習Ⅱに関して14回の内容を記入してください」として、それぞれ、使用した文献および授業内容を回答する内容である。いずれのアンケート項目も、具体的に記述式で回答してもらうことを求めた。

アンケートの回答数は10であるが、そのうちの1件は、回答者から、資料としての使用を許可しない旨申し出があった。したがって、有効回答率は60%である。

(3) 以下、2010年度の基礎演習Ⅱの概要等については、教務委員会作成の文書「H22年度基礎演習Ⅱの具体化に向けて（教務委員会素案）」（2010年1月14日付）、および「H22年度基礎演習Ⅱの具体化に向けて」（2010年2月3日付）を参考とした。

アンケート実施の時期については、本来、基礎演習Ⅱが終了した直後に行うべきであったところ、年度が変わった6月になって行うこととなった。このことが、担当教員に不要な負担をかけ、また、回答率の低さを招いたと考えられる。反省すべき点である。ただし、提出された回答は、それぞれ具体的に記入されており、有意義な内容となっている。

3. アンケート分析結果

3-1. 教科書

「基礎演習Ⅱ」について使用する教科書の選定は、各教員が行った。上述の担当予定教員による協議において同意された教科書選定の基準は、以下の4点である。①読み書きのリテラシーの素材として位置づけ、専門に特化しない、②社会科学分野の身近な社会問題を扱った平易な文献、③新書、および④前掲3点を基準として1冊または2冊を使用する、というものである。さらに、この基準に合致する例として、教務委員会によって12冊の文献が示された。

以下では、アンケート第3問目の、教科書に関する回答について分析したい。なお、アンケート回答の1件が、この問いについては無回答であった。

教科書として指定した文献を具体的に回答してもらったが、使用された文献のほぼすべてが上記の基準に則しており、各教員が、教科書使用の基本方針を共有すべきであると認識していると評価することができる。ただし、新書以外の文献が1冊あった。この点について、基礎演習Ⅱの教科書として、新書という枠組みが有する意味について再度確認あるいは議論を行う必要性を指摘することができる。⁽⁴⁾なお使用された文献は合計12冊であり、教務委員会によって例示された文献の使用は、そのうち4冊であった。

文献の選定理由については、大きく2種類の着眼点があるといえる。1つは文献のテーマであり、もう1つはその文献の使用によってある一定の能力を獲得させることを狙いとするものである。これら2つの着眼点は、各文献によって明確に分離されるものではなく、当然ながら、両方の着眼点からの評価により選定されている文献もあった。

1点目の文献のテーマによる選定については、テーマの重要性を挙げるものが多かった。また、テーマの身近さを選定理由に挙げるものがある一方で、逆に、学生の視野を広げるために、学生に直接には関係が薄いテーマであることを文献選定の理由としているものもあった。さらに、内容が担当者の専門分野に近いことを理由の1つとしているものがあった。ただし、専門知識の修得が目的ではなく、上記基準の①および②を前提に選定されたもののようである。

2点目の能力の獲得を狙いとする選定については、文書の段落構成および文中の引用の手

(4) 前掲ワーキンググループの報告書では、基礎演習Ⅰよりは一般的・抽象的な社会学系の啓蒙書として、新書または選書を位置づけている。

法、議論を行うために必要なスキル、物事を批判的に分析し伝える力が挙げられている。基礎演習Ⅱの「到達目標」が「専門的な研究を進めるための基礎的土台となる、読み書き能力、分析能力、討論・プレゼンテーション能力を身につけること」とされていることを鑑みると、興味深い着眼点である。ただし、その教科書をどのように活用することによって、上記能力の獲得を目指したのかという詳細な点まではアンケート結果からは判明しなかった。

教科書の使用冊数については、1冊使用、2冊使用がともに4件であった。使用した教科書の冊数による教育効果の違いが判明するようなアンケート項目は設けておらず、この点は、今後のアンケート実施における課題である。

3-2. 授業内容

基礎演習Ⅱはその授業内容の共通化およびシラバスの統一化が図られている。ベースとなるシラバス素案は、教務委員会により作成された。シラバスの項目の多くは内容が統一されているが、授業計画については、教務委員会の作成したシラバス素案をベースに、担当教員が作成するという方法が取られ、授業計画に共通して組み込む事項は次の通りとされた。すなわち、講義の概要説明と運営方針の確定・「私の学びのデザインシート」の提出（第1回）、自己紹介と受講生の到達・獲得目標の確認（第2回）、論点の整理とレポートまたは書評の提出（第13回）、レポートまたは書評の講評（第14回）である。これに対して、教科書についての検討（輪読：発表と討論）の回数、中間的なまとめの挿入等は各担当教員が設定することとなった。

以下では、第4問目の、授業内容に関する回答について分析する。なお、アンケート回答の1件が、この問いについては無回答であった。

上記の授業計画に共通して組み込むべき事項およびその実施回については、そのベースに則した形で取り入れられているものがほとんどである。これは、各教員が、授業内容の配分の共通化に関する認識を共有することができているものと評価できよう。ただし、「私の学びのデザインシート」について表記のある回答は1件のみであった。

第3回目以降は、多くの教員が「報告」および「討論」を組み合わせる形で授業を進めている。報告のスタイルとしては、報告資料の作成を義務付けた「グループ報告」が多いようである。ただし、前稿「基礎演習Ⅰアンケート分析」と同様、どのような報告スタイルあるいは内容を学生に課しているのかという詳細な点まではアンケート結果からは判明しなかった。

授業内容について特徴的なのは、シラバスに挙げられている修得すべきスキルについて、そのスキルの教授自体を授業内容の1つとして組み込んでいる教員が多いことである。「基礎演習Ⅱ」について、多くの教員が「一定のスキルの獲得が目標である」ことを共通認識としていると評価することができる。ただし、教授されているスキル自体は、文書の読み方・

プレゼンの方法・文書の作成方法・レジュメの作成方法と、各教員により異なる。これは、後述の主眼点が各教員で異なるための当然の結果であるといえる。また、この「スキルの教授」について、各教員がどのような授業を行っているのかという詳細については、これも、アンケート結果からは判明しない。ただし、これに関して配布された資料については、下の「3－5. 演習運営上の工夫」において言及する。

3－3. 基礎演習Ⅱ実施の際の主眼点

第1問目の、基礎演習Ⅱという授業を実施する際に各担当教員が重要視したポイントに関する回答について分析する。

基礎演習Ⅱについては、その「到達目標」が「専門的な研究を進めるための基礎的土台となる、読み書き能力、分析能力、討論・プレゼンテーション能力を身につけること」とされていることは前述したが、これらの能力の向上を挙げている回答が多かった。これについては2つのパターンに分けることができる。これらの能力を満遍なく向上させることを目指すものと、そうではなく、ある能力の獲得に傾注するものである。前者は1件、後者は4件であった。さらに、後者について、獲得を目指す能力として読み書き能力を挙げたものが2件、プレゼンテーション能力・ディスカッション能力を挙げたものが2件であった。このように、教員が最重要視して向上を図った能力にばらつきがあるのは、基礎演習Ⅱで獲得すべき能力について、その程度が明確にされていないこと⁽⁵⁾に原因があると考えられる。すなわち、これは次項とも関連するが、基礎演習Ⅰで獲得すべき能力の程度（あるいは能力とその程度）が明確にされておらず、そのため、基礎演習Ⅰに対して「より高度な」能力の修得を目指す科目として位置づけられている基礎演習Ⅱにおいて獲得すべき能力とその程度は、あいまいとならざるを得ないといえることができる。この点については、今後議論し、確認していくことが必要である。

3－4. 基礎演習Ⅰとの関連性

第2問の、（シラバス上の基礎演習の位置づけについて）実現するにあたって困難だった点に関する回答について分析を行う。

第2問は、基礎演習Ⅱが、基礎演習Ⅰを修了した学生がより高度な能力を身につけることを目指す科目として位置づけられていることについて、その位置づけ自体から生じる授業運営の困難さがあるのではないかと予想して、そのことについて回答を求める狙いがあったが、その関連性自体について明確に言及している回答は1件だけであった。

日本語自体の読み書き能力やプレゼンテーションの前提としての文章を要約する能力の低

(5) ただし、読む能力に関しては、新書程度のまとまった文書を読解する能力を目標としているといえよう。

さを指摘する回答があった。これについては、基礎演習Ⅰでどの程度の能力を獲得していることを前提に授業を構成すべきなのか明確ではない点が、基礎演習Ⅱ運営の難しさの一因である可能性を指摘することができる。

基礎演習ⅠおよびⅡの両方を同年度に担当した教員からは、その経験に基づく回答があった。基礎演習ⅠとⅡについて、連続性・発展性を持たせられたとはいえ、また、基礎演習Ⅰでは自発的な資料収集とそれに基づくプレゼンテーションを重視し、基礎演習Ⅱは文献の読解・討論・レポート作成を中心に、すなわち、基礎演習Ⅰとは異なる役割を持った（あるいは補完的な）導入科目と位置づけた講義運営となったというものである。この回答については、検討すべき事項が2点あるものと考えられる。第1点は、基礎演習Ⅰと基礎演習Ⅱの果たすべき役割についてである。すなわち、上述の能力すべてについて、均等に基礎演習Ⅰで獲得を目指し、さらに基礎演習Ⅱでその向上を目指すのか、それとも、基礎演習Ⅰおよび基礎演習Ⅱのそれぞれにおいて、一定の能力に重点を置いてその能力の獲得を目指すのか、という問題である⁽⁶⁾。この問題については、今後の検証・議論が必要であろう。もう1点は、基礎演習Ⅱの講義内容について、その実際の構成・運営については、教員個人に負うところが非常に大きいということである。上記と重複するが、少なくとも、基礎演習Ⅰを担当しない教員もいるということを前提に、基礎演習Ⅰで獲得すべき能力の程度が明確にされたうえで、その発展として基礎演習Ⅱの授業内容を組み立てることができるようにすべきである。

3-5. 演習運営上の工夫

第2問に対しては、共通化された授業内容についての改善点や、各教員による講義運営上の工夫についても回答がなされた。

改善すべき点としては、教科書の冊数・授業計画の制約の多さ、教科書のテーマと学生の関心の不一致が挙げられた。

講義運営については、様々な工夫が回答されている。レジュメ作成の技術、ディスカッションの前提として学生同士のコミュニケーションが充分に行われるための工夫、活発なディスカッションを促す工夫などであり、さらにまた、それらの工夫の一環として作成された配布資料もアンケートに添付して提出された。その一部は、上述の「スキルの教授」に関連して配布されているものと考えられる。これらは、基礎演習運営のためのノウハウとして学ぶべきものが非常に多い。しかしながら、現在、これらの技術を教員が共有するための場が存在しない。前述の「スキルの教授」の方法という技術についても同様である。技術を共有するための場を設け、継続していくことが重要であろう。また、レポートの書き方・文章の構成法などについて共通のルールを設定・マニュアルの作成を望む回答があったが、提出された

(6) 前記ワーキンググループの報告書においては、「読み書き能力もプレゼン能力も、恒常的に満遍なくトレーニングすべきではないか？」とされている。

資料を見る限り、これらのスキル自体については各教員によってある程度確立されており、情報共有の上でマニュアルを作成することも不可能ではないであろう。

おわりに

以上のアンケート分析の結果として、以下の点を指摘することができる。担当の各教員は、基礎演習Ⅱについてある程度の共通認識に立って、あるいは、基礎演習Ⅱの内容の共通化について重要性を認める姿勢をもって基礎演習Ⅱの講義運営にあたっている。しかしながら、基礎演習ⅠとⅡの連結、ひいては、基礎学力を着実に修得させ、専門演習・卒業論文作成につなげるための1～2年次全期間を通じた学部専門導入教育カリキュラムの検討が不十分であるために、困難を生じている点があると考えられる。この点については、できるだけ早い議論が望まれる。ただし、その議論を行うにあたって、基礎演習Ⅱ実施の経験を重ね、今回のようなアンケートなどにより、データを蓄積することも、また必要である。さらに、各教員個人の技術・能力は高いものの、それを学部全体で共有することができておらず、その点が、大きな問題である。これらを共有する場を設け、定期的の実施していくことが重要である。

